

**日本語講師北山淳友の事績  
—戦間期の滞独時代を中心に—  
The Achievements of Japanese Lecturer Dr. Junyu  
Kitayama**

**小川 誉子美  
横浜国立大学**

**要旨**

北山淳友は、戦前・戦後のヨーロッパで日本語講座の教壇に立った。現在、諸外国で日本語教育に携わる日本人講師は、大勢いるが、戦前においては、どのような人物が日本語を教え、また、講師には、現地から、また、日本からはどのような期待が持たれていたのだろうか。当時のヨーロッパで研究活動を送る日本人の中でも際立った学問的業績を持つ北山淳友という人物の奇跡を辿る。

**キーワード：**

日本語・日本文化講座、哲学、ベルリン日本研究、留学生

# 日本語講師北山淳友の事績 —戦間期の滞独時代を中心に—

小川 誓子美  
横浜国立大学

## 1. はじめに

戦前、留学生としてヨーロッパに渡り大学等で日本語講師となった者は、かなりの数にのぼる。1930年代後半、ドイツやその近隣地域に増設された日本語講座には、日本人講師が教壇に立った。彼らのほとんどは、第二次世界大戦終結後には帰国している。北山淳友（哲学・宗教学）は、1924年に浄土宗派遣留学生として渡欧し、戦前、戦後と日本語を教える機会を得た。しかし、戦争終結後も日本の地を踏むことなく、1962年、プラハで生涯を閉じた。北山の日本語講師としての業績は明らかになっていないが、戦前の欧州で最も長く日本語を教えた講師であることには間違いない。当時、ヨーロッパで日本語講師を務めた人物とはどのような人物であったのか、そうした人物の一人として北山淳友をとりあげ、当時の日本語講師像に迫る。

## 2. ヨーロッパで日本語を教えた日本人講師

これまで戦前のヨーロッパの日本語教育といえば、主に、東洋学の伝統のあるフランスや、イギリスの大戦下の語学兵の養成について紹介されてきた。しかし、ドイツ・イタリア等でも、日本の開国以降、日本語講座が開設され、独自の展開を見せていたという事実は知られていない。教壇に立った講師には、現地講師のみでなく、日本人講師もいた。明治以降、のべ、50名をくだらない日本人講師が日本語の教壇に立っていたと思われる<sup>1</sup>。

19世紀後半から1945年までの100年間で、日本人講師に注目すると、最も顕著な増加をみせるのは、1930年代のドイツであり、日本政府が日本語講座支援に乗り出したのも、この時期のドイツであった<sup>2</sup>。外交記録から確認できる範囲で、日本大使館による最も古い支援の記録は、1932年に講師手当が支払われたという記録である。この手当が受給された講師が、北山淳友であった。

当時、ドイツやイタリア等で日本語講師を務めた人物は、浄土宗・曹洞宗派遣学生、交換学生、フンボルト給費生という身分で、研究を目的に、ドイツ、オーストリア、イタリア、ハンガリー

<sup>1</sup> 日本語講師として招聘され渡欧した第一号は、1873年にヴェネチア大学の教壇に立った吉田要作であろう。

<sup>2</sup> 小川（2010）第1・2章参照。

に渡った留学生であった<sup>3</sup>。大半の講師は、留学中に大使館から推薦を受け、大学と契約を結んだものと思われる。いずれもいわゆる非常勤講師であり、学期あるいは年単位の契約であった。専門は、哲学やドイツ語・ドイツ文学が多かった。哲学が、北山淳友のほか、松本徳明（ボン大学）、桑木務（ヘルシンキ大学）、ドイツ文学が、芳賀檀（ベルリン大学）、植田敏郎（ウィーン大学）、田中泰三（ハンブルク大学）、大賀小四郎（ボン大学）、比較言語学や一般言語学、ヨーロッパ言語を専門とするものに、外山高一（ブタペスト大学・ウィーン大学）、今岡十一郎（ブタペスト）、岩倉具実（ハイデルベルク大学）、前田護郎（言語学・ボン大学）、野上素一（ローマ大学）、徳永康元（ブタペスト大学）、守屋長（スラブ語学・ワルシャワ大学、フランクフルト大学、ハンブルク大学）、千足高保（ロシア語・ベルリン大学）らがいた。彼らは、現代の日本語教育で必要とされる日本語に関する知識や言語教育の経験というより、古典語やヨーロッパの複数の言語学習の経験を有する当地の学問や文化事情に詳しい者であったといえる。

講師の留学中に残した学術面の成果についても記しておく。ワイマール時代に留学生として渡独し、後に日本語を教えるようになった者に、北山淳友のほか、松本徳明、杉本勇蔵、植田敏郎、岡正雄、若山淳四郎らがいるが、彼らは、いずれも当地で博士論文を執筆している。松本徳明（ボン大学）はスリランカ留学の経験を、杉本勇蔵（ハンブルク大学）はイギリス留学の経験を有し、ドイツで博士論文を執筆し学位を得た。また、植田敏郎や岡正雄は、ウィーン大学に論文を提出し学位を得ている。一方、若山淳四郎（ボン大学）は1923年に渡独しハイデルベルク大学で学び、日本の農業政策について論文を執筆したものの、最終的には提出を断念した。中でも、北山淳友の研究活動は注目に値する。

### 3. 北山淳友

戦前のヨーロッパの日本人講師の中で、卓越した研究教育成果を残したと評され、かつ、戦前・戦後と日本語の教壇に立った北山をとりあげ、略歴と、研究者としての側面、日本語教育やその他の活動について、紹介する。ここで用いる資料は、略歴については、『東と西 永遠の道』（1985 北山淳友 北樹出版）を、その他の項目では、フランクフルト大学古文書館（フランクフルト）、連邦古文書館（コブレンツ）、外交史料館（東京）の記録文書、及び、アジア歴史資料センターのデジタルアーカイブを用いた。

#### 3.1 略歴

---

<sup>3</sup> 戦間期に日本語教師として渡欧したのは、村田豊文（ベルリン大学、ウィーン大学）岩倉具実（ハイデルベルク大学）摩寿意善郎（ナポリ王立東洋学校）である。

北山淳友は、1902年、静岡県浄土宗の住職である寺に生まれ、旧制静岡中学を卒業した。その後、宗教大学（現大正大学）に入学し、仏教学、インド学、中国古典を学び、1924年に卒業した。同年、フライブルク大学に浄土宗派遣留学生として入学し、現象学のエドムント・フッサール、インド学のロイマンに就いて学んだのち、1927年より、ハイデルベルク大学に移り、インド学、仏教学、チベット学、社会学を学び、実存哲学のカール・ヤスパーズの下で博士論文をまとめた。マールブルク大学の宗教資料収集研究所の助手を務めるかたわら、1930年、博士論文「仏教の形而上学」をヤスパーズ教授に提出し、卒業した。

1930年より、フランクフルト大学で「日本文化と日本語」を講義し、マールブルク大学の助手を務めながら、日本語、日本文化、東方文化の指導にあたったが、1936年、大使館の依頼でベルリン日本学会第二主事に就任することになり、フランクフルト大学を辞した。1940年マールブルク大学東洋文化宗教学の客員教授（Honorary Professor）に任命され、日本語科目のほか、哲学、仏教、東洋思想、比較思想、文化史などの科目を担当した<sup>4</sup>。

1944年には、プラハへ移り、プラハ日本総領事館内の東亜研究所所長を務めるかたわら、ドイツカール大学（カレル大学）東洋文化精神史研究所の再建にあたった。戦争終結後の消息については、北山（1985）によると、チェコ・スロヴァキアが独立国となり、政変のため強制収容され、1年間労働に服すが、1946年、開放され、柔道教師、日本語講師を務めたという。その後、脱出をはかるが、遂げられず、身辺の警戒が厳重となった。1951年、図書館の利用許可を得、研究生生活にもどるが、1961年病を得、プラハ郊外の病院に入院、1962年に客死したと記されている。

### 3.2 研究者としての北山

北山が卓越した研究教育業績を残したと評される側面について、主に、北山（1985）から抜粋する。

（1）北山の学問的成果はドイツに渡った当初から囑望されていた。フライブルク大学からハイデルベルク大学へ移る際、長引く滞在を心配する父親に、フライブルクでの指導教官であったフッサールは、次のような書簡を送り、北山の資質について評価した<sup>5</sup>。

「あなたのご子息、淳友氏の修学期間が長引くので、あなたのご心配なさっているとの事ですが、失礼ですが、私は淳友氏の教師として、あなたがまったくご安心なさっておられてよいと、保証申し上げます。私は始めから淳友氏に対しては関心をいだいており、そのすぐれた天賦と勤勉、そして一般科学および哲学の教養における進歩を、楽しんできました。（略）私の印象では、ご子

4 「日本の世界観」「文化哲学演習—ヘーゲル歴史哲学」「禅仏教」「ゲーテと老子」「老子とニーチェ」「中国の神秘思想家」「リルケと芭蕉」「極東文化史」などの科目を担当した。

5 日本語訳は北山の父の知人と記されている。

息の未来はすばらしいものになり、そしていつかは、あなたもご子息を誇られるようになるにちがいありません。ご子息のサンスクリットの教師，ロイマン教授にせよ，また，ご子息を知っているすべての人々も，ご子息に囑望しております。あなたは，あらゆる点において，ご子息のことについてはお喜びになられて差し支えありません。」（Edmund Husserl）

（2） フランクフルト大学時代の 1934 年ごろ，枢密顧問官であり，文化形態学の創始者の一人であるフロベニウス（L. Frobenius 文化形態学研究所所長）から，当時構想中であつた文化形態学研究所内に日本部門を設置し，日本部門の所長として北山に就任してほしいとの打診があつた<sup>6</sup>。

（3） 学位論文が出版され，ドイツの仏教学者や哲学者に評価され，高水準の学術誌“Kant-Studien”（1935）では北山の学問的態度に賞賛が送られた<sup>7</sup>。その後，7 冊の著書，と 22 本の論文をいずれもドイツ語で発表している。

（4） 1940 年，『西東の出会い—日本文化と伝統—〈West-östliche Begegnung—Japans Kultur und Tradition—〉』を出版した。この著書について，K・エッガーは，『Zeitgeschichte』誌 1941 年第 10 号に，次のような書評を送っている。

「我々は，小編のわずか 250 頁たらずの濃縮されたこの著作の中に，燃えるような，現今の文化政治的問いをめぐる世界文学の最も本質的は既出の出版物の中の一つを見つけ出す。我々は，単純でないヨーロッパの問題性と我が人種の精神領域の歴史についての彼の深く学識豊かな知識と確かさという点において，北山の前代未聞の感性移入能力に感心する。だがまた我々には彼の自尊心も目につく，すなわち，彼のその自尊心でもって彼は日本文化と習慣の根底を我々にまざまざと見せそして解説している。この書では，自らの民族の使命によって貫徹され，かつまたその理解を請願することが必要でない，そんな一人の日本人が執筆している。彼は，はるかに多くのことがらを，つまり，彼の民族の正統さを，根拠づけている。だから率直に，そのような態度に対して，我々ドイツ人は満腔の共感を覚えるのである。（中略）我々ヨーロッパ人は，北山から，最も気高い態度でかなり手きびしい真理を知らされたと言わねばならぬ。我々は充分にそのことを位置し，彼とは感謝の念で結ばれている，なぜなら，彼は我々に本当の弱さを容赦なく見ぬく手助けをしたからである。」<sup>8</sup>

この著書が，マールブルク大学名誉教授への就任業績につながつたという。

<sup>6</sup> フランクフルト大学古文書館の資料による。

<sup>7</sup> 北山（1985：390）。

<sup>8</sup> 北山（1985：412）。

(5) 1940年、マールブルク大学東洋文化宗教学の客員教授 (Honorar Professor) に任命された。当時の活動については以下のように記されている。

「1940年秋の新学期以来、ベルリン日本研究所の日本人主任である北山淳友教授が、われわれの大学で名誉教授として「東洋文化及び宗教学」の講義を担当している。それに加えて彼は、宗教資料収集研究所の日本部門の担当でもある。この外国人研究者がわれわれの研究室で引き出す活発な興味のおかげで、われわれは、急速に増加しすでに今日では十分に内容豊かな資料の領域を手に入れている。」<sup>9</sup>

「東洋学・インドゲルマンの講座は、一九四〇年秋から四四年秋まで、われわれの大学で名誉教授として Dr・北山教授が日本文学、文化と宗教史の重要なテーマを扱ったことによって、しっかりと前進展開されていた。」<sup>10</sup>

## 4. 北山の活動

### 4.1 日本語講師として

北山は、当時の講師の中で、複数の機関を渡り、最も長い間日本語日本文化講座の教壇にあった。北山 (1985) によると、1929年からフランクフルト大学で日本語と東方文化を教えた。当時のフランクフルト大学の講義要目には、北山の担当科目が記されている。

#### 画像 1 フランクフルト大学講義要目 (1932年夏学期)

Sprachen und Geschichte Ostasiens.	
†Einführung in die chinesische Literatursprache (Haenisch, Lehrgang); Mi. 17-19, Fr. 17-18.	Rousselle. [5801]
†Einführung in das Mandschurische; Fr. 16-17.	Rousselle. [5802]
†Der konfuzianische Staatskult; Mi. 16-17.	Rousselle. [5803]
†Übungen zum Diamantsutra (chinesisch mit Berücksichtigung der tibetischen und Sanskrit-Versionen); Fr. 11-13.	Rousselle. [5804]
†Im Seminar: Übungen an einem klassischen chinesischen Text (unter Heranziehung der mandschurischen Version); Mo. 17-19.	Rousselle. [5805]
*† I. Kurs: Chinesische Sprache für Anfänger; 3 stdg. n. Verabr.	Ting. [5701]
† II. Kurs: Chinesische Sprache für Fortgeschr.; 4 stdg. n. Verabr.	Ting. [5702]
† III. Kurs: Einführung in die moderne chinesische Literatursprache; 4 stdg. n. Verabr.	Ting. [5703]
†IV. Kurs: Fortsetzung des III. Kurs; 4 stdg. n. Verabr.	Ting. [5704]
†Übung in der klassischen Sprache; 4 stdg. n. Verabr.	Ting. [5705]
*†Schönschreibübungen mit Pinsel; 1 stdg. n. Verabr.	Ting. [5706]
*†Die Entwicklung der chinesischen Schrift und ihre Bedeutung; 1 stdg. n. Verabr.	Ting. [5707]
†Dichter und Dichtungen Japans; Mi. 16-17.	Kitayama. [5751]
†Übungen über die heiligen Texte des japanischen Buddhismus (Versuch der philosophischen Interpretation der buddhist. Theologie Japans); Di. 15-17.	Kitayama. [5752]
*†Einführung in die japanische Sprache a) für Anfänger; n. Verabr.	Kitayama. [5753]
b) für Fortgeschrittene; n. Verabr.	Kitayama. [5754]

<sup>9</sup> マールブルク大学の学生便覧。北山 (1985: 402)。

<sup>10</sup> 北山 (1985: 410)。

当時、北山が受けた講師手当の一部を抜粋すると、次のようである。講師手当で支給にいたる経緯や、日本からの講師手当が支払われた費目に注目すると、当時の日独間の興味深い事実が垣間見える<sup>11</sup>。

大学の給与		日本側の講師手当		
1930	80RM	1933.1～34.3	50RM	満州事変啓発費
1934	150RM	1934.4～35.3	100RM 50RM	外務省満州事変啓発費 大使館満州事変啓発費
		1935.4～36.8	150RM	国際文化事業費
		1936.9	350RM	国際文化事業費（転勤手当）

単位（月額、RM＝帝国マルク）

その後、1936年から、ベルリン日本研究所副主事、1940年以降は、マールブルク大学東洋文化ゼミナールで日本語とともに「東アジアの文化と宗教」を教えた。1944年には、プラハへ移り、ドイツカール大学の東洋学講座の教壇に立った。戦前だけでも、5機関を経験し、3機関で日本語を教えたことになる。

## 4.2 ベルリン日本研究所副主事として

北山が、文化形態学研究所の日本部門の所長としての就任を打診されながら、フランクフルト大学を去ることになったが、これは、ベルリン日本研究所副主事（日本人主事）への就任を依頼されたことによる。ベルリン日本研究所（Japan-Institut Berlin）は、1927年、カイザー・ヴィルヘルム協会（Kaiser-Wilhelm-Gesellschaft）の直轄下におかれた研究機関として活動を開始した。この研究所は、日本の近代化の理解には、日本の宗教及び歴史研究が必要と考えられ、その促進につとめた機関であった。初代日本側代表として、鹿子木員信が着任し、講演活動などを行っていたが、1930年代になると、伊藤忠太、荒木光太郎ら、日独交換教授らが日本から派遣され、この研究所を拠点とし、各地で講演活動を行っていた。

1930年代半ばに、日独関係が活発化する中、日独文化協定が締結（1938年）され、各種文化事業の実施にあたり、ベルリン日独連絡協議会が設置された。この協議会に日本側代表として参加していたのが、ベルリン日本研究所の副主事であった。国際連盟を脱退し、国際的発言の場を失った日本にとって、ドイツは、欧米において広報の最大の拠点であった。このドイツでの広報活動の拠点となる重要なポストに、現地事情に詳しい、国際的に通用する有能な一流の学者を就

<sup>11</sup> 小川（2010）第2章参照。

任させるのは、急務であったと思われる<sup>12</sup>。連絡協議会副主事を務めたのは、このほか、若山淳一郎（ボン大学）、村田豊文（ベルリン大学・ウィーン大学）ら、いずれも、日本語講座を担当していた者である。彼らは大学の授業のほか、日独連絡協議会に日本側代表として参加し、各種事業の企画やドイツ各地での講演もこなしていた。ベルリン日本研究所副主事の講演活動については、北山の行った講演タイトルが残っている。

■講演題目（1938年秋以降）

「日本造形美術に就いて」「日本の庭園芸術」「日本の詩歌と詩人」「東亜における世界強国日本」「日本の世界観と時局」「日本精神と時局」「東亜における世界観の真相」「日支事変の真相」

■講演題目（1942—43年）

「日本民族の尚武的性格」「日本の国家思想」「強国日本の生成」「日本の国家的発展過程」「日本歴史観の根本概念」「日本人の生活に於ける芸術的要素」「日本の日常生活」「武士道」なかでも、「東亜における世界強国日本」という題目の講演は、十数回に及んでいる。一連の講義名から当時の国策にそった天皇制、武士道、国体イデオロギー中心のイメージ作り、日本の精神文化浸透を目的とし、文学、武士道、芸術等を通じて、日本的なるものや日本精神を捉え、当時のドイツ精神への啓蒙活動が行われていったことが推測される。

聴衆は、在ベルリン日本大使館からの報告によると、50名から多いときは700名にもものぼったとされている。ドイツ側の共催団体は、製炭工場、植民技術者協会、国民教育所などであったといい、さまざまな層に向けての啓蒙活動であったことがわかる。

このほか、ドイツでは、大戦下に、ミュンヘン、マールブルク、ハイデルベルク大学、さらに、ヨアヒムスタール・ギムナジウムと、日本語講座が開設されたが、これらの開設は、日独文化連絡協議会の協議を経て実現したものであった。

学者としての評価も高く、学問的に常に厳格な態度を示してきた北山は、フランクフルト大学での新しい任務を辞退し、大使館からベルリン日本研究所の副主事として「国家的な」任務を命ぜられたのである。この任務のかたわらマールブルク大学客員教授として教壇に立っていたが、マールブルク大学での講義においても、その中心は宗教学から日本語と日本学に絞られ、ドイツ精神への啓蒙をおびてくるようになったという<sup>13</sup>。

一方、日本の紙面で紹介された北山は、「親ありと思ふな 声の対面さへ拒んだ気丈の母 全独絶賛の邦人教授」と題する母と子の美談の中で取り上げられていた。

<sup>12</sup> 小川(2010)第4章参照。

<sup>13</sup> 北山(1985: 403)。



画像2 北山を紹介する新聞記事 (1943年2月14日夕刊)



「学位をお土産に帰国、故郷に錦を飾ろうと、その旨実家に通知したところ、同氏の父忍光和尚は「学术研究の大成するまでは決して帰国するな」と激励、博士はこの父の教訓を脳裏に異国の地に踏みとどまり、教鞭をとりつつさらにナチス哲学の勉強にいそしんだ。この若き教授の涙ぐましい姿をベルリン大学の教室に眺め感激した現駐独大島大使は陰になり同博士の研究を援助、博士は大使の援助に感激してさらに研究に没頭して（略）ナチス学生の人気呼んで「ドクター北山」の名は広く全獨に知られるに至った。（略）北山氏はこの悲電（父の訃報）を手にして、そうだ俺はまだ大成しているのではない、これからはお国のために働かなければならぬと決意、以来盟邦ドイツと我が国を結ぶ文化提携に努力を続けているのだがこの感激の話題がベルリンの

芳賀檀氏から日独文化協会に報告されてきた、感激した同協会では渡独以来18年老いたる母の姿を胸に活躍する子と成人した子を偲ぶ母とを国際電話によって結び、声の対面をはかろうと計画したが、(略)大東亜戦争下そんなこともしてられません、戦う兵隊さんのお母さんに申し訳がありません、お国のために息子もお役に少しでも立ってくれたら、それで満足です、協会側のご好意には感謝にたへませんが — 辞退を申出て同協会関係者を感激させ決戦下にゆかしい話題をまいている。」<sup>14</sup>

大島大使との「緊密ぶり」とともに、一時帰国をすることもなく学問に邁進し、ナチス哲学を学び親の死に目にも逢うこともなく日独文化連携活動に専念し「お国のために」働く模範的学者として紹介されていた。

### 4.3 チェコ

チェコでの足取りについて、北山(1985)の年譜から以下、抜粋する。

1945年5月、終戦とともに、チェコ・スロバキアが独立国となり、政変のため強制収容され、一年間労働に服す。この間山上軍監獄その他へ転々として移送された。

1946年夏、収容所より解放された。

1946年6月、チェコスロバキア国体育協会の依頼により柔道教師となり、各地を歩く。また国立外語学校にて日本語の講師となる。

1947年、数回脱出をはかったが、果たさず。身辺の警戒ますます厳重となる。

1951年、東洋研究所の図書館を利用する許可を得、研究生活に入る。日本に帰るための論文作成に専念しようと決心する。

1961年10月、心臓病でブラハ郊外トマヤロヴァ病院に入院。

1962年1月15日、講道館三役に列せられた。

1962年1月19日、スミドヴァ老夫妻に見とられ逝去。

チェコでは、ブラハでの不自由な生活にもかかわらず、比較哲学ないし仏教哲学の数篇の論文を書き上げ、戦前からの研究の完成を志したという<sup>15</sup>。

こうした一連の研究は、実弟や関連分野の研究者の尽力により、『東と西 永遠の道—仏教哲学・比較哲学論集』北山淳友、北樹出版、1985)として出版されたのである。

<sup>14</sup> 東京新聞 1943年2月14日夕刊より抜粋。

<sup>15</sup> Dr. Miroslav Novak (1924-1982 日本文学)は、氏である北山に大きな影響を受けたという(金指久美子氏のご指摘による)ことから、この間、教育に従事していたと思われる。

## 5. 日本語講師像と当該分野の研究について一まとめにかえて

日本語講座は、多くの場合、東洋及び日本を研究対象とした講座に併設されており、日本研究の手段の一つという位置づけであった。ベルリン大学のように、渡日を控えた言語の専門家養成をめざす機関は、むしろ稀であり、多くの場合、それぞれの学問領域の一フィールドとして日本を対象とした研究のかたわらに日本語講座が置かれていた。そうした中で日本語の教壇に立つ講師には、語学力や学識や学問的態度以上の要件が求められていたであろうことは想像に難くない。永井松三が「日本文化の海外宣伝」（1940）の中で海外の日本文化宣揚にあたる者の資格として「教養」「風格」「語学力」をあげるが、北山は、これ以上のものを持っていたと思われる。北山には、常に新たな任務が用意されていたのである。いずれの面においても、余人を持って代え難い人材であったというべきであろう。

最後に、当該時代の傑出した人物の活動がこれまで十分に各領域で記述すらされてこなかった事実について私見を述べたい。北山（1985）において、年譜等をまとめた藤本浄彦氏は、次のように述べる。

「多分、今日の日本とドイツの仏教及び哲学研究者で、北山淳友なる人物の名前を知っている人はわずかであろう。このことは、日本の仏教思想と哲学の研究にとっては全くの不幸であり、一方、とりわけヒトラー時代を意識的に止揚しようとしている戦後の西ドイツ全般の考え方のもとでは自然の成り行きのようにも思われる」<sup>16</sup>

たしかに、ドイツ語圏の日本研究者の間では、ナチス政権時代は破壊され失われたものがあまりにも大きく、この時代は暗黒時代であったという認識が強い。「ヒトラー時代を意識的に止揚しようとしている戦後の西ドイツ全般の考え方」に関し、ナチズムと日本研究の関連を扱うヴォルムは次のように述べる。

「大学では比較的新しい学科に属する日本文学研究科の歴史は、今なお広範な研究対象となっていない。このことは長い間タブー視され、言い換えれば歪曲して描かれてきた1933年から1945年までの時代に特に言える。短い伝記的な概要を除いては（ゴッホ、フリーゼ）、ナチスの時代の日本学研究が果たした役割は、今日まで詳細な検討がなされずにいる。いつでも作成可能であったと思われる文献目録もなく、同様に、当時の日本学研究が生み出したものを、同分野の歴史と理念の歴史に基づく評価もなされていない。（中略）口述の歴史を採用する可能性も、残念ながら非常にないがしろにされている。」<sup>17</sup>

ヴォルムが「短い伝記的概要」を記したというフリーゼは、この時代の研究を次のようにとらえている。

---

<sup>16</sup> 北山（1985：388-389）。

<sup>17</sup> ヴォルム（1991:59）。

「30年代～40年代からすでに半世紀以上も経過したが、本分野の広範な研究は今なお全く行われていない。ましてや、第一次世界大戦終結から第二次世界大戦開戦までの時期の日独関係の文化事業と文化政策に関する広範な研究は言うに及ばずの状態であり、我々は両国の文化関係史が全く存在しないことに気付くのである。」<sup>18</sup>

フリーゼは、さらに、歴史上の欺瞞を解明する役を担う専門学としての日本文学研究は、実践面での文化事業にとってはあまり役に立たないため、実践家たちからイニシアチブが生まれなければならないと指摘する。たしかに、優秀な研究者が政治的、「人種」的理由で大学を去っていった時代であり、論及に値しない、あるいは、戦後ページされた研究者の関わった「取り扱い」が困難な時代ということから、着手が躊躇されているという事情もあろう。日本研究と表裏一体をなして展開していった日本語講座の実態を明らかにすることによって、当該分野の一端も明らかになる。

しかし、こうしたヴォルムやフリーゼの指摘を受けて、記録をひも解き空白を埋めようという動きがあるのか、いまだ定かではない。北山をはじめ、当時の日本語教育や文化事業に関わった人物が当該時代に活動したという事実拘泥するあまり、個々の活動すら記述されないのなら、史実の直視を回避するだけでなく、日本語・日本文化講座史の空白は永遠に埋められることなく、本来あるべき評価の可能性すら閉ざされてしまうのである。

## 参考文献

- 小川誉子美 (2010) 『欧州における戦前の日本語講座—実態と背景—』 風間書房  
北山淳友 (1985) 『東と西 永遠の道—仏教哲学・比較哲学論集』 北樹出版  
フリーゼ, エーバハルト (1994) 「30年代と40年代の文化事業に関する考証」 『ベルリン日独センター報告集』 第12号 ベルリン日独センター pp. 55-58  
ヴォルム, ヘルベルト (1994) 「ナチス時代の日本学研究」 『ベルリン日独センター報告集』 第12号 ベルリン日独センター pp. 59-62  
JACAR デジタルアーカイブ  
Ref. B04011339200 Ref. B04011339300 Ref. B04011341500 Ref. B04011341700  
Ref. B04011341800

## 謝辞

Chikako Shigemori Bucar 氏、金指久美子氏には貴重な資料及び助言をいただいた。この場を借りて御礼を述べたい。

---

<sup>18</sup> フリーゼ (1991:55)。